

FLORA KANAGAWA

Dec. 20. 1998 No. 47

神奈川県植物誌調査会ニュース第47号

〒250-0031 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

振替 00230-5-10195



ホシクサ. 海老名市上今泉にて(1998年9月10日, 新井二郎氏撮影, 538ページ参照).

勝山輝男: 植物誌2001サンプル版ヒユ属	524
山本 明: ホクリクイヌワラビ続報	529
藤野知弘: 座間市におけるラン科植物の生育状況覚書	530
田中京子: ベニバナセンブリとハナハマセンブリについて	530
田村 淳: 神奈川県新産のコシノサトメシダ	532
田村 淳: 三浦半島で初めてのシダ	532
高橋秀男・馬場しのぶ: コゴメミズを海老名市で採集した	533
高橋秀男・諏訪哲夫: テツカエデをウリハダカエデに訂正	533
金子紀子: チョウジタデの呼吸根について	536
奥津 均: 鎌倉のセイコノヨシも健在です	537
馬場しのぶ: ホシクサの大群落について	538

植物誌2001サンプル版ヒユ属

(勝山輝男)

植物誌2001の内容,体裁などについて,数回の編集会議や執筆予定者会議をもち,検討を重ねてきました.その際にヒユ属の部分をサンプルとして作成しました.ヒユ属は似たものも多く,敬遠する方も多ようです.最近,判明した新しい帰化種もあり,既存の図鑑類では調べにくいグループ

なので,調査の際の参考になると考え掲載します.実際の植物誌とは版の大きさが異なり,分布図もありませんが,本文の内容や図版はこのようなものを目指しています.本文中の文献は省略した形で載せています.「長田帰化72」は1972年に出された北隆館の帰化植物図鑑,「ニュース」は植物採集ニュースです.他の文献は略称から想像がつくと思います.

ヒユ属 *Amaranthus* L.

1年草.花は単性で雌雄同株のものが多いが,雌雄異株のものもある.花序は腋生のものから頂生の花穂をつけるものまである.雌雄同株のものでは花序のなかに雄花と雌花が混生する.1つの花には3または5個の花被片と1~3個の小苞がある.小苞が花被片よりも長いものは,小苞の先が針状に尖り,そのために花穂はとげとげしく見える.果実は胞果で,中に1種子を入れ,横に裂開するものと,裂開しないものがある.胞果が裂開しないものをイヌビユ属(*Euxolus* L.)として分けることもある.種子は円盤形で黒いものが多い.世界の熱帯から温帯に約60種があり,特にアメリカ大陸に多い.畑地や牧草地の雑草が多く,食用または鑑賞用に栽培されるものもある.日本に在来のもはなく,15種が帰化または逸出し,そのうち14種が神奈川県でも記録されている.

文献: Sauer, J.D., 1967. The Grain *Amaranthus* and Their Relatives: A Revised Taxonomic and Geographic Survey. *Annals of the Missouri Botanical Garden* 54:103-137.; Aellen, P. revised by Akeroyd, J.R., 1993. *Amaranthus*, in Tutin et al, *Flora Europaea* Vol.1, second edition pp.130-132. Cambridge University Press, London; Gleason, H.A. & A. Cronquist, 1991. *Manual of Vascular Plants of Northeastern United States and Adjacent Canada*, Second Edition. lxxv+910pp. New York Botanical Garden, New York.

- A. 胞果はほぼ中央で横に裂開する.小苞は花被片と同長または長い
 - B. 頂生の花序がある
 - C. 雌雄異株
 - D. 小苞は花被片の1.5倍以上の長さがある.花被片はへら形で果実の1.5倍長(約3mm)
..... (1)オオホナガアオゲイトウ
 - D. 小苞は花被片とほぼ同長.花被片はへら形にならず果実と同長(約1.5mm)
..... (2)ヒメアオゲイトウ
 - C. 雌雄同株
 - D. 刺はない
 - E. 花被片5
 - F. 花被片は胞果よりも著しく長く,上部が幅広いさじ形 (3)アオゲイトウ
 - F. 花被片は胞果と同長またはやや短く,さじ形ではない
 - G. 葉は菱形で上面は濃緑色,下面は緑白色.花序はあまり枝を分けず,ほとんど無毛.小苞は花被の2倍長.種子は直径1.1mm (4)イガホビユ
 - G. 葉は卵形で両面ともに緑色.花序は斜上する多くの枝を分け,有毛.小苞は花被の1.5倍長種子は直径0.9~1mm (5)ホソアオゲイトウ
 - G. 葉は卵形で大きく,両面緑色.花序は多くの横に開出した枝を出し,無毛.小苞は花被と同長またはやや長い程度.種子は直径1mm (6)スギモリゲイトウ
 - E. 花被片3 (7)ヒユ

- D. 刺がある (8)ハリビユ
- B. 花序は腋生
- C. 小苞は花被の2~3倍長あり, 先が尖り反曲する. 種子は直径0.8mm (9)ヒメシロビユ
- C. 小苞は花被と同長で反曲しない. 種子は直径1.5mm (10)アメリカビユ
- A. 胞果は裂開しない. 小苞は花被片の半長またはそれより短く目立たない
- B. 花序は腋生. 花被片はいちじるしいさじ形 (11)サジビユ
- B. 頂生の花序がある
- C. 胞果は花被の2倍長あり, 表面は滑らかで皺がない (12)ハイビユ
- C. 胞果は花被と同長またはやや長く, 表面は多少皺がある
- D. 胞果は果時に硬化せず, 表面の皺は浅い. 種子には著しい光沢がある. 葉は先が凹む
..... (13)イヌビユ
- D. 胞果は果時に褐色で硬くなり, 表面の皺が著しい. 種子の光沢は少ない. 葉は先があまり凹まない (14)ホナガイヌビユ

(1) オオホナガアオゲイトウ *Amaranthus palmeri* S. Watson

別名タリホノアオゲイトウ. 北アメリカ原産の帰化植物. 雌雄異株. 雌花, 雄花ともに小苞が花被片よりも長いことでヒメアオゲイトウと区別する. 特に雌花の小苞は花被片の2倍の長さがあり, 花穂はとげとげしく見える. 種子は他種よりも一回り大きく直径1.2mm. 1930年代(昭和初期)にはすでに渡来していた(長田帰化72). その後, 本州から九州まで広がっているが, それほど多くはない. 神植誌58には記録がなく, 神植誌88から取り上げられた. 東京(小松, 1968, ニュース(35):2)や千葉(吉川, 1968, ニュース(40):32)で1968年に初記録があることから神奈川県への帰化は1970年代の高度経済成長期頃と思われる. 県内ではやや稀.

(2) ヒメアオゲイトウ *Amaranthus arenicola* I.M. Johnst.

北アメリカ原産の帰化植物. 雌雄異株. 雌花, 雄花ともに小苞は花被片とほとんど同長. そのために花穂は前種に比べて著しく細く感じる. 種子は直径0.8~1mm. 第2次大戦後に日本に帰化. 西日本を中心に散発的に見られる. 出口帰化には1976年に横浜市神奈川区出田町を記録している. また, 森はKPM-NA1034804の標本の備考欄に1978年に山下埠頭の確認を記している. 神植誌88では横浜市神奈川区で記録されたのみ. 標本: KPM-NA1034804 横浜市神奈川区出田町 1980.09.28 森茂弥

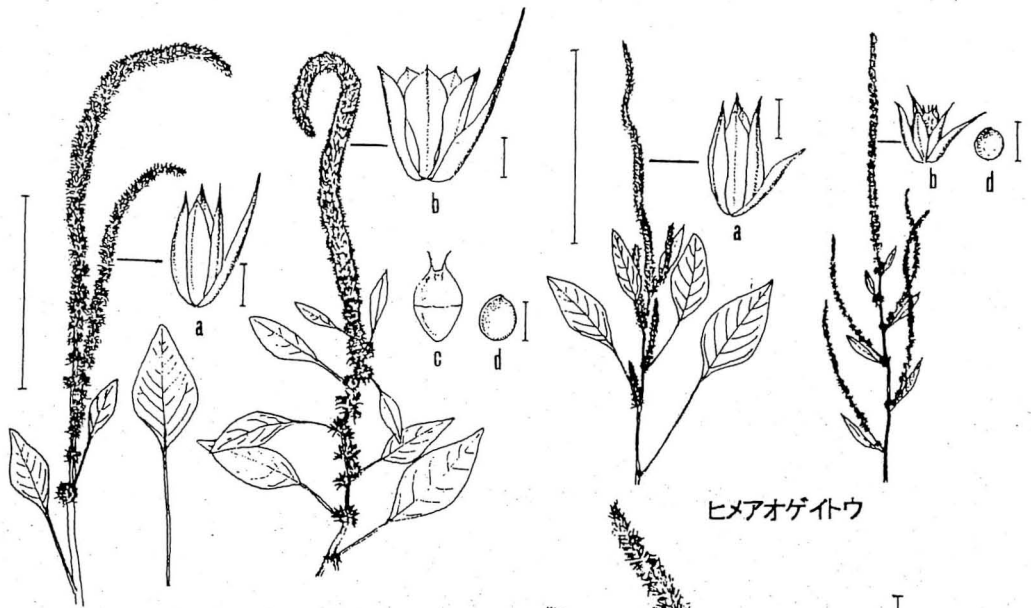
(3) アオゲイトウ *Amaranthus retroflexus* L.

別名アオビユ. 北アメリカ原産の帰化植物. 葉は卵形で下面脈上には毛がある. ホソアオゲイトウに比べ, 花穂は太くて短い. 花穂の軸は茎とともに縮毛が生える. 花穂の小苞は花被片の1.5~3倍の長さがあり, 花穂は著しくとげとげしく見える. ホソアオゲイトウやイガホビユとの区別に自身がない場合は, 花被片の上部が幅広いさじ形で, 胞果よりも著しく長いことを確認できれば確実である. 世界の熱帯~温帯に広く帰化している. 日本には1910年代(明治時代末)に渡来したと推定され, その後日本全国に広がったが, ホソアオゲイトウのように爆発的には増えていない. 神植目33にすでに記録がある. 県内ではやや少ない.

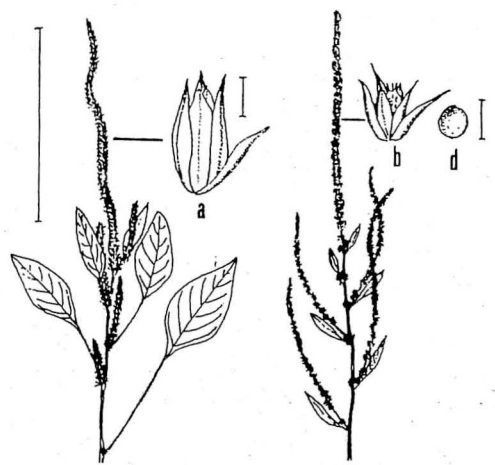
(4) イガホビユ *Amaranthus powellii* S. Watson

北アメリカ原産の帰化植物. 葉はひし形で, 上面濃緑色, 下面緑白色でほとんど無毛. ホソアオゲイトウに比べて, 花穂は単純であまり分枝しない. 花穂の軸は茎とともに無毛またはわずかに毛がある程度. 小苞は花被片の2倍近くあり, 花穂はとげとげしく見える. 種子はホソアオゲイトウに比べてやや大きく直径1.1mm. 静岡県清水市に帰化したものに杉本(1969, ニュース(44):58)が *A. powellii* と同定し, 上記の和名をつけた. 一般に認識されていないために, 報告は少ないが, 神奈川県ではアオゲイトウよりも多く見られる. 全国的にもかなり広がっていると思われる.

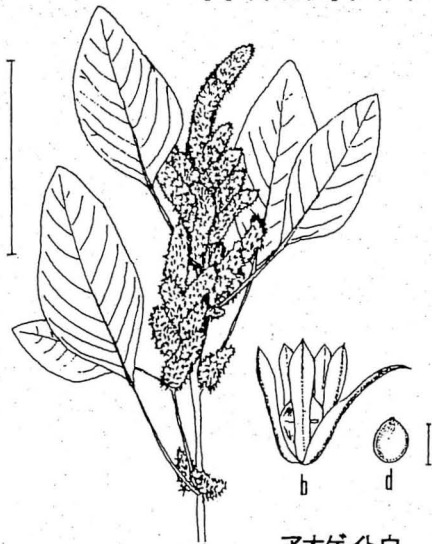
ホナガアオゲイトウは原(1937, 植雑13:57-58)がホソアオゲイトウに比べて穂が長く疎らで, 小苞が花被の2倍に達するものに *A. hybridus* をあてたもので, 日本のおもな植物誌や図鑑ではこれを踏襲してきた. しかし, 最近のアメリカやヨーロッパの文献を読むと, *A. powellii* の記載がホナガ



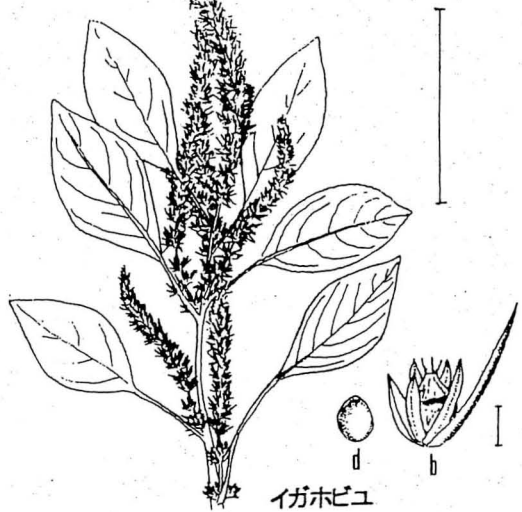
オオホナガアオゲイトウ



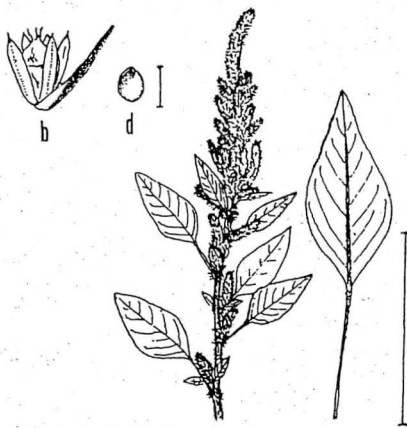
ヒメアオゲイトウ



アオゲイトウ



イガホビユ

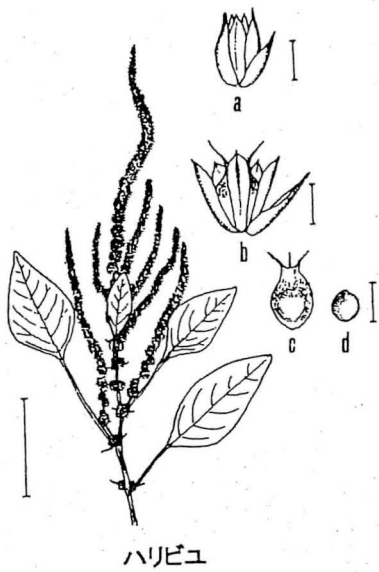


ホノアオゲイトウ

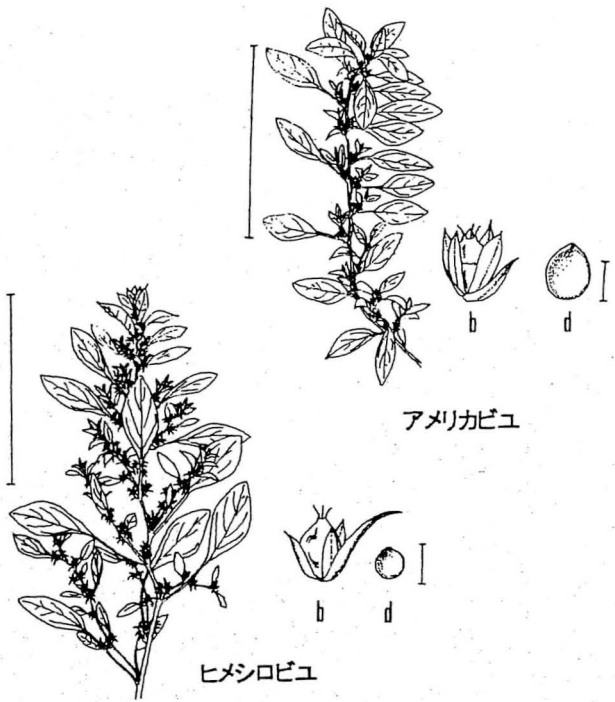


スギモリゲイトウ

a:雄花 b:雌花 c:胞果 d:種子 スケール 大:10cm 小1mm



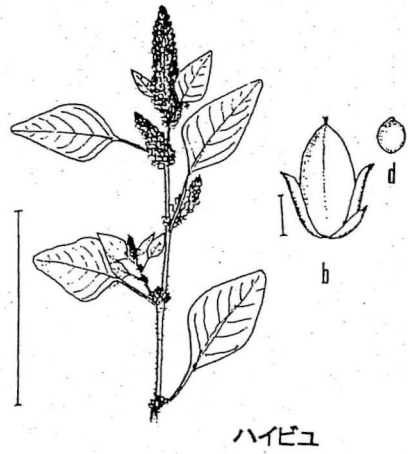
ハリビユ



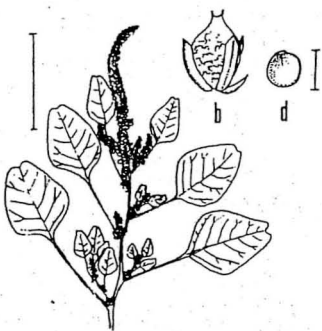
アメリカビユ



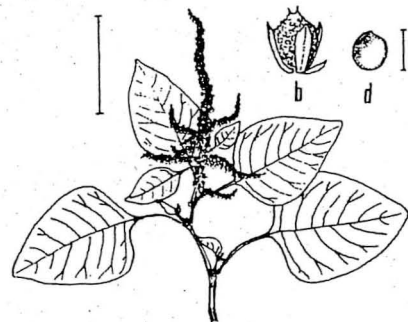
サジビユ



ハイビユ



イヌビユ



ホナガイヌビユ

a:雄花 b:雌花 c:胞果 d:種子 e:花被片 スケール 大, 中: 5cm 小1mm

アオゲイトウに近い。原(1937)のホナガアオゲイトウが *A. powellii* と同じものかどうかは不明であるが、ホナガアオゲイトウと同定されてきたものの一部は *A. powellii* であった。

(5) ホソアオゲイトウ *Amaranthus hybridus* L. (*A. patulus* non Bertol.)

熱帯アメリカ原産の帰化植物で、全国各地の畑地、荒地、道端などにきわめて普通に見られる。葉は卵形で、上面と下面の色の差はあまりなく、下面脈上はやや有毛。花穂は普通多数の枝を出す、ときにあまり分枝しないものもある。花穂の軸は茎とともに縮毛が密生する。小苞は花被片の1.5倍長程度。種子はイガホビユよりも少し小さく直径0.9~1mm。世界の熱帯~温帯に広く帰化している。原(1937)が気づいて、ホソアオゲイトウと名づけたときにはすでに日本各地に帰化していたという。

ホソアオゲイトウにはこれまで *A. patulus* Bertol. があてられていた。しかし、Tutin et al(1993)によると、*A. patulus* は *A. cruentus* (スギモリゲイトウ)と同じものとされ、ヨーロッパの学者がそれまで *A. patulus* としてきたものは *A. hybridus* とされている。Sauer(1967)や Gleason et Cronquist(1991)の記載の *A. hybridus* もホソアオゲイトウと同じものと思われる。したがって、ホソアオゲイトウが *A. hybridus* そのものと考えた。これまで日本では *A. hybridus* はホナガアオゲイトウとされてきたが、ホナガアオゲイトウにはイガホビユの項で記した問題点がある。

(6) スギモリゲイトウ *Amaranthus cruentus* L.

熱帯アメリカ原産の栽培植物。葉は卵形で大きく、下面脈上も無毛。花穂は多くの横に開出した枝を出し、軸は無毛。小苞は花被片とほとんど同長。世界で広く栽培される。日本では稀に栽培され、ときに野生状態のものが採集される。県内でも稀。花穂が紅色または黄色のものが *A. paniculatus* L. とされていた。標本:KPM-NA1034945 神奈川県星野町路傍 1981.10.11 山田文雄

(7) ハリビユ *Amaranthus spinosus* L.

熱帯アメリカ原産の帰化植物。葉柄のつけ根に刺があり、他のヒユ属との区別は容易である。種子はやや小さく直径0.8mm。世界の熱帯~温帯に広く帰化。日本には明治時代初期に渡来したと推定され、本州中部以南では畑地の強害草となっている。神植目33にはすでに記録がある。県内ではやや普通。

(8) ヒユ *Amaranthus mangostanus* L.

アジア原産で栽培植物。花は葉腋に団塊状にかたまり、茎の上部ではそれが接続して花穂状になる。頂生の花序があり、胞果が胞間裂開し、花被片が3個しかないものは本種と判断できる。日本では古くから栽培され、ときにそれが逸出する。県内で野生状態のものが採集されることは稀である。

(9) ヒメシロビユ *Amaranthus albus* L.

別名シロビユ。北アメリカ原産の帰化植物。アメリカビユに似るが、小苞は花被の2~3倍の長さがあり、先は反曲して鋭く尖る。花被片は3個。種子は直径0.8mm。世界の暖帯~温帯に広く帰化。日本には1930年代(昭和初期)に渡来し、北海道~九州まで点々と記録があるが、数は少ない。県内では1975年に藤沢、1977年に横浜市鶴見区大黒町で採集されたという(出口帰化)。県内ではきわめて稀。

(10) アメリカビユ *Amaranthus blitoides* S.Watson

別名イヌヒメシロビユ。ヒメシロビユに似るが、小苞は花被片と同長か少し長い程度でほとんど反曲しない。花被片は4~5個。種子は大きく直径1.5mmある。北アメリカ原産でヨーロッパ、アジア、オセアニアに帰化。久内(1943, 植研19:185)が横浜税関内で発見し、イヌヒメシロビユと命名した。後に、久内帰化で中国大陸に帰化したものにアメリカビユの名があることから和名を訂正している。長田帰化72には1942年に伊達健夫が横浜で採集した標本が引用されている。神植誌88では採集されなかったが、その後下記の標本が採集された。標本:KPM-NA105393 横浜市中区山下埠頭 1993.08.19 山田文雄

(11) サジビユ *Amaranthus crassipes* Schldtl.

北アメリカ原産の帰化植物。高さ50~100cm。葉は菱状卵形で長さ0.7~4cm、幅0.3~2cm。花序は腋生で、稀に上部が短い花穂状になることがある。花被片は5個で、上部の幅が広いさじ形、長さ1.5~2mm。胞果は表面にこぶ状の突起があり、裂開せず、長さ約2mm。種子は黒色で光沢があり、直径約

0.8mm. 森茂弥氏が横浜市中区で発見し、神植誌88で日本新産の帰化植物として和名を新称した。標本:KPM-NA1034813 横浜市中区山下埠頭 1981.07.26 森茂弥

(12) ハイビユ *Amaranthus deflexus* L.

熱帯アメリカ原産の帰化植物。茎は基部で平伏し、多数分枝する。胞果は花被片の2倍位の長さがあり、表面にしわがない。種子は黒色で光沢があり、直径約1mm。世界の温帯に広く帰化。日本には1921年に東京で記録

され、各地に広がるが数は少ない。神植誌58に横浜、川崎、藤沢等各地とあり、この頃にはかなり広がっていたと思われる。県博の標本で最も古いものを引用しておく。標本:KPM-NA0080894 横浜市中区本町 1953.08.17 出口長男

(13) イヌビユ *Amaranthus lividus* L.

ヨーロッパ原産と推定される帰化植物。葉の先端が強く凹むことでホナガイヌビユと区別されるが、葉の形では判断がつかないことも多い。花被片は基部と上部の幅がほとんど変わらず、胞果は成熟しても硬くならず、しわも少ない。種子は黒色で強い光沢があり、直径約1mm。世界の熱帯から温帯に広く帰化。日本には江戸時代に渡来したと推定される。日本全国の路傍や畑地に普通に生え、県内でもきわめて普通に見られる。

(14) ホナガイヌビユ *Amaranthus viridus* L.

別名アオビユ。熱帯アメリカ原産の帰化植物。葉の先はイヌビユほど強く凹むことはない。標本をチェックした際にはイヌビユとの誤認が多かった。胞果は熟すと、表面が硬く、褐色になり、こぶ状の強いしわがある。種子は黒色で、他のヒユ属に比べて光沢が弱く、直径約1mm。世界の熱帯から温帯に広く帰化。日本には大正時代に渡来。その後各地に広がり、現在ではイヌビユよりも普通に見られる。県内でも畑地や路傍にきわめて普通。

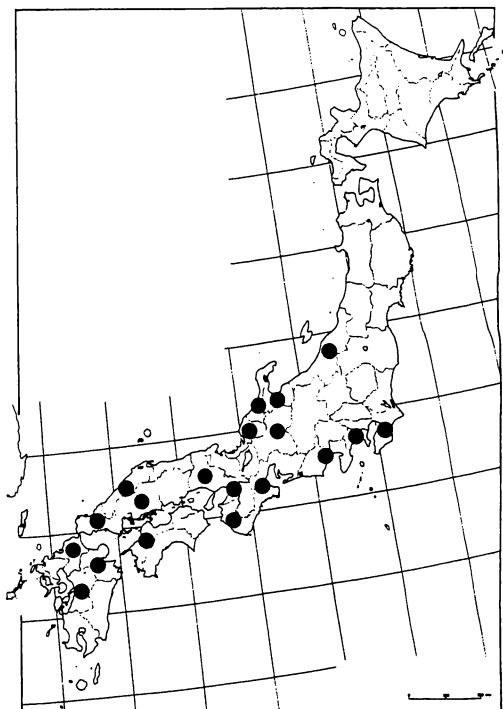
ホクリクイヌワラビ続報

(山本 明)

本誌前号でホクリクイヌワラビ

についてふれたが、7月末に発見者の上野勝典氏の御案内で、大森先生はじめ有志の方々と一緒に現地を訪れることができた。現地での観察と胞子を調べた結果、ホクリクイヌワラビに間違いないことが分かり、神奈川県の新種を加えることができた。

自生地は三浦半島観音崎のスタジイ、シロダモを優占種とし、アオキ、ヤツデ、トベラ、ヤブツバキ、カラスザンショウ、フウトウカズラ、イヌビワ、テイカカズラ、ケカマツカなどからなる林で、山道沿いの東向きの崖の上に数株が認められた。付近に見られたシダ類はアスカイノデ、ベニシダ、オオイタチシダ、ミゾシダ、ナチシケシダ、ジュウモンジシダ、オオパノイノモトソ



ホクリクイヌワラビの分布。倉田・中池著日本のシダ図鑑の図に追加。

ウ、イヌワラビ、ヤブソテツなどであった。雑種であるホクリクイヌワラビの片親のウラボシノコギリシダを捜したが、確認できなかった。シダの雑種では、片親にあたる種類が近くになくとも見られる場合があるが、ウラボシノコギリシダは千葉県の房総以西に点々と分布しているの、神奈川県でも三浦半島や小田原、真鶴あたりで出現する可能性があり、この方面を歩かれる時には特に注意して調査をされることをお願いしたいと思う。

ホクリクイヌワラビは、初め杉本順一先生がウラボシノコギリシダの品種として記載されたものを(1966)、芹沢俊介先生が多く資料を検討されてウラボシノコギリシダとイヌワラビの雑種 *Athyrium* × *saitoanum* (Sugim.) Seriz. として、あらためて発表されたものである(1986)。今回の発見も含めてホクリクイヌワラビの分布を示すと前ページの図のようになる。

現地を御案内頂いた上野氏に深謝致します。

文献

- 杉本順一, 1966. 日本草本植物総検索誌シダ植物篇. pp. 211, 404. 六月社
芹沢俊介, 1986. ホクリクイヌワラビについて. 植物地理・分類研究 34: 65-69.

座間市におけるラン科植物の生育状況覚書

(藤野知弘)

今年は猛暑で天候不順。野山の動植物も四苦八苦しているように見える。1998年6月25日に、県立谷戸山公園内にマヤラン *Cymbidium macrorhizon* Lindl. を確認した。2m×5mの枠内に15株ほどが開花していた。数年前よりムヨウランがあると聞いていたが、今回、マヤランがあることを確認し、写真も撮ったが、個体数が少ないので標本にはしなかった。

また、5月には、谷戸山の雑木林に、多数のササバギンラン *Cephalanthera longibracteata* Blume とキンラン *Cephalanthera falcata* (Thunb.) Blume, 少数ながらサイハイラン *Cremastra appendiculata* (D. Don) Makino が生育しているのを再確認できた。近くの林床にはイチヤクソウの群生が見られ、オニノヤガラ *Gastrodia elata* Blume も散見されたが、ミズニラは確認できなかった。谷戸山公園の工事は、ほぼ終了したので、林内の調査を再開しようと公園協会や関係団体等で相談しているところである。

座間市緑ヶ丘の成光学園は、アキザキヤツシロラン *Gastrodia confusa* Honda et Tuyama の産地であるが、去年は多数見られたものの、今年は8月現在、まだ確認できていない。

ベニバナセンブリとハナハマセンブリについて

(田中京子)

横浜市鶴見区大黒埠頭の海づり公園で、吉川アサ子さんが、1998年7月2日に採集された標本を、県立生命の星・地球博物館の勝山輝男先生が同定された結果、ヨーロッパ原産のベニバナセンブリ *Centaureum erythraea* Rafin (リンドウ科シマセンブリ属) と判明した。神奈川県では新産と思われるので報告する。

採集された標本をもとに形態や特徴を記す。越年草。茎は高さ20~45cm。花期にも根生葉があり、長さ1.5~3.5cm、幅1.0~1.5cmの楕円形、または倒卵形で鈍頭。3~5本の葉脈がある。茎葉は対生し、長さ1.2~2.5cm、幅0.4~1.0cmで楕円形、または卵状披針形で、鈍頭または鋭頭。茎の上部で枝を分け、集散花序に紅紫色の花を多数つける。花は苞葉の腋に1個ずつ着き、ごく短い花柄がある。萼は筒状で5深裂し、裂片は

線形、尾状鋭先頭、長さ6~8mmで、花冠筒部とほぼ同長。花冠は、長さ10~15mmの高杯状で5裂し、裂片は卵形鈍頭で、長さ4~5mm。雄しべは5個。後にラセン状にねじれ脱落する。さく果は萼とほぼ同長。

イギリス、スウェーデンから南ヨーロッパ、地中海地域にかけて、また南西アジア、パミール地方に分布し、乾燥した草地、砂丘等を好む。北アメリカ、ニュージーランド、オーストラリアに帰化している。日本には、1960年頃広島県呉市に帰化している。(久内,1960.植物研究雑誌35:256)大正中頃に観賞用として輸入されたものが広まったようで、その後は三重県(太田,1997.改訂三重県帰化植物誌)兵庫県(水田,1994.兵庫の植物(4):107)で記録されている。

シマセンブリ属では、この他にハナハマセンブリ *Centaureum tenuiflorum* (Hoffmanns.&Link) Fritsch が神奈川県、富山県、東京都に帰化している。ハナハマセンブリは花期に根生葉がなく、花冠はやや小さい(10-12mm)。ヨーロッパ原産で、北部フランスから南部・西部ヨーロッパに分布し、オーストラリア、ニュージーランドに帰化している。日本では、横浜市中区山下埠頭で採集され、神奈川県植物誌1988で、日本新産の帰化植物としてはじめて報告された。神奈川県植物誌1988では学名を *C. pulchellum* (SW.) Druce としたが、その後富山県で同種のもので採集され、太田道人ほか(1997,富山市科学文化センター報告(20):105)は、学名は *C. tenuiflorum* が適切ではないかと指摘している。ヨーロッパの文献を見ると、*C. pulchellum* の茎は、2~4節あり、下部で枝分かれし、花は明らかな小花柄がある。一方、*C. tenuiflorum* の茎は5~9節あり、上部で分枝し、花はほとんど無柄である。神奈川県でハナハマセンブリとした標本を調べ直してみると、*C. tenuiflorum* の記載

に一致する。したがってハナハマセンブリの学名は、太田ほか(1997)が指摘するように *C. tenuiflorum* とするのが適当と思う。

この報告文を作成するにあたり、勝山輝男先生にご指導いただきました。厚く御礼申し上げます。



ベニバナセンブリ。a:全体、b:花。

神奈川県新産のコシノサトメシダ

(田村 淳)

コシノサトメシダ *Athyrium negletum* Seriz. は北海道から本州中部以北に分布し(中池, 1992), 一般的に日本海要素のシダとして知られている。そのコシノサトメシダを本年9月29日に丹沢山にて発見した。ブナ林の林床に一株のみ生育していた。付近にはスズタケ, ウツギが生育していた。株には2枚の葉が有ったが, すでに地に伏していた。一見したところ, イヌワラビ属であることがわかったが, 付近でよく見かけるヘビノネゴザとは羽片に柄があること, ヤマイヌワラビとは葉柄が藁色であることと鱗片が淡褐色であることから, 両種ではないことが推察できた。ただし, ヤマイヌワラビにも葉柄が藁色のものがあるので, ヤマイヌワラビの線も残しておいた。

帰宅後検鏡したところ孢子嚢はすでに裂開して形の崩れた包膜の辺は裂けていたので, サトメシダと同定した。しかし, サトメシダを見たことがなかったので千葉県立中央博物館の中池先生に同定していただいたところ, コシノサトメシダであると教えていただいた。また, 日本海側には多いコシノサトメシダであるが, 神奈川県では新産だろうという意見をいただいた。そこで, 神奈川県植物誌(1988), 丹沢大山自然環境総合調査報告書(1997)を調べたところ, 名前が無かったので新産と考えた。さらに念のため, 神奈川のシダにも詳しい山本明先生に意見を伺ったところ, 新産であることが判明した。

新産であるとはいえ, 一株しか見あたらなかったため今後の動態が気になるところである。来春からは注意して観察を続けていきたい。

最後に, 標本を同定していただいた中池先生, ならびにご意見をいただいた山本明先生に感謝します。

参考文献

中池敏之, 1992. 新日本植物誌シダ編, 868pp., 至文堂。

三浦半島で初めてのシダ

(田村 淳)

ホソバイヌワラビ

Athyrium iseanum Rosenst.

本年11月5日に逗子市沼間のスギ林にて一株発見した。秋に出た新葉が鮮やかな黄緑色であった。葉は全部で8枚ほど有り, 旧葉すべてにゲンマ(無性芽)が着いていた。これを基に個体数を増やしてくれたらと思う。周囲はリュウメンシダとヤブミョウガが繁茂していた。ホソバイヌワラビは神奈川県において各地に散在するものの, 三浦半島では初めての記録である。他所でも空中湿度の高い沢沿いの人工林下では今後も見つかる可能性がある。

イヌケホシダ

Cyclosorus dentatus (Forrsk.) Ching

本年11月14日に上野勝典氏夫妻と横須賀市の田浦温泉谷戸に行く途中で発見した。人家の植え込み下の石垣に一株だけ生育していた。一見したところミゾシダと思ったが, そのときはアラゲミゾシダを見つけない気持ちもあって, 葉裏をめくるとソーラスが丸いことでミゾシダではないことがわかった次第である。では何シダか? というとき幾つかのシダの名前をあげては消去して, 最後に出てきたのがイヌケホシダであった。ルーペで裂片の最下葉脈が合着することでイヌケホシダである自信を持った。葉は一面ほこりに覆われていた。これは道路脇にあることと, 葉全体に毛があることに関係があると思われる。周囲にはツワブキ, イノモトソウが生育していた。

県内では藤沢市川名, 川崎市多摩区, 横浜市中区に分布が知られている程度である。もちろん三浦半島では初めてである。

また、千葉県の西船橋駅構内にも生育しているのを著者は見たことがある。イヌケホシダは亜熱帯性のシダであるが、暖温帯の人為的環境に少しずつ分布を広げているようである。

参考文献

倉田悟・中池敏之, 1983. 日本のシダ植物図鑑第3巻 p.34-38.

小崎昭則・北川淑子, 1994. 多摩丘陵のシダ植物, 131pp.

コゴメミズを海老名市で採集した

(高橋秀男・馬場しのぶ)

南アメリカ原産のコゴメミズ *Pilea microphylla* Liebn. を、海老名市国分の清水寺公園で採集した。

本種はイラクサ科の1年草または越年草で、ブロック壁や石垣の下、敷石や溝の間などに生える雑草である。丈は低く、高さは5~20cm、全体がやや多肉質で、枝分かれが多く、葉や花を密につける。大きい葉と小さい葉が接近して対生し、葉身は倒卵状の楕

円形、長さは2~8mm、幅2mmほど。葉腋に長さ0.2~0.5mmの、小さな淡緑色の花を束生する。標本を拡大して見ると、葉面に白い細かな横筋が見える。これは鐘乳体と呼ばれるもので、よい特徴となる。

沖縄諸島や九州に帰化が知られ、本州では植物園の温室などにしばしば見られる。沖縄では野外で、年中見られるという。寒さに弱い植物であるから、これが越冬できるかどうかは明きらかでないが、一時帰化として報告しておきたい。

テツカエデをウリハダカエデに訂正

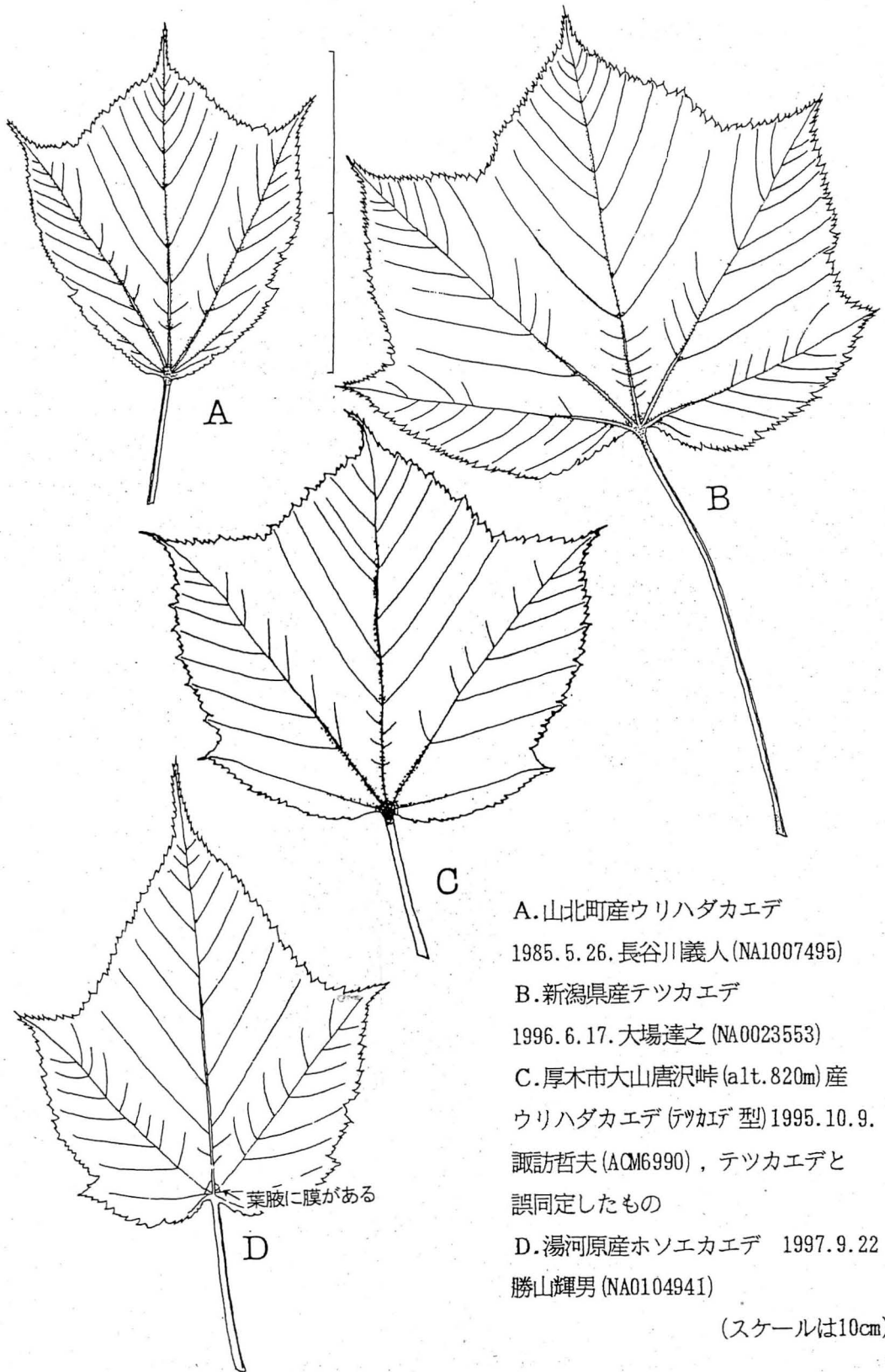
(高橋秀男・諏訪哲夫)

FLORA KANAGAWA 44号(1997)において筆者らは、「神奈川県新記録のテツカエデについて」という報文を発表したが、その後の再調査により、テツカエデは同定の誤りであり、ウリハダカエデ *Acer rufinerve* Siebold et Zucc. とすべきであるという結論に達したので訂正したい。

テツカエデ・ウリハダカエデ・ホソカエ



コゴメミズ、海老名市国分(1998.9.20 馬場しのぶ KPM-NA0112769).



A. 山北町産ウリハダカエデ
1985. 5. 26. 長谷川義人 (NA1007495)

B. 新潟県産テツカエデ
1996. 6. 17. 大場達之 (NA0023553)

C. 厚木市大山唐沢峠 (alt. 820m) 産
ウリハダカエデ (テツカエデ型) 1995. 10. 9.
諏訪哲夫 (ACM6990), テツカエデと
誤同定したもの

D. 湯河原産ホソエカエデ 1997. 9. 22
勝山輝男 (NA0104941)

(スケールは10cm)

テツカエデとウリハダカエデの果実の変異.

	果実の数	翼の角度	分果の翼長	果実の幅
テツカエデ	20~40個	90°	13×30mm	25~50mm
ウリハダカエデ	15個	70~120°	8×20mm	20~35mm

デは葉身について類似点が多く、多くの図鑑類で記述を比較してみても殆ど同じである〔図A~D〕。しかし、ホソカエデが裏面の脈腋に小さな膜をもつのに対し、テツカエデ・ウリハダカエデは膜がなく、代りに縮毛をもつので、筆者らの採集した厚木市大山唐沢峠(alt.820m)の標本(1995)が、ホソカエデでないことは明瞭である。そこで、花または果実を採集すべく努めた結果、ようやく数枚の果実標本(田中美記子、高橋秀男)を得ることができた。

厚木市唐沢峠産の標本は、葉の裂片は5個、葉柄の長さ3~5cm、果実の数11~13個、果実の翼の角度90~120°、分果の翼長5×15mm、両翼を上げた果実の幅23mm、小果柄の長さ4mmであった。

今回得られた標本は果実のついた枝のみで、花は比較していない。唐沢峠産標本を神奈川県立生命の星・地球博物館に収蔵されている標本と比較検討するとともに、緒方(1965)、大井(1975)、清水(1987)らのデータともあわせ比較してみた。

博物館に収蔵されているウリハダカエデとテツカエデの標本で、果実のついた枝の葉を選んで、葉柄を測定したところ、ウリハダカエデは2~5cm、テツカエデは7~16cmで、葉柄の長さには明らかな差異が認められた。緒方(1965)はテツカエデの葉柄は、葉身の2/3から等長であるのに対し、ウリハダカエデは、葉身の1/4から2/5であるという。このデータからも唐沢峠産はウリハダカエデに該当する。

葉身の裂片はテツカエデが5個、ウリハダカエデの典型的なものでは通常3個であるが、ときに5個のものがある。大山唐沢峠

産の標本が、ウリハダカエデの例外とされる裂片が5個に相当するもので、葉身を見ただけではテツカエデと間違え易い。

花の数はテツカエデが多く、ウリハダカエデは少ないので区別点になるが、花の大きさはテツカエデが小さく径3-4mm、ウリハダカエデは大きく径8-10mmある。唐沢峠の花はまだ見ていないが、いずれ比較して見たいと思っている。

果実については、前出の文献に標本庫のデータをあわせて示すと上表のようになる。

このデータと唐沢峠産を比較してみても明らかにテツカエデのデータによく合致することがわかった。

以上比較してきた様に、葉身はきわめてテツカエデによく似るが、ほかの形質から見るとウリハダカエデの範疇に入るもので、「テツカエデ型の葉身をもったウリハダカエデ」と結論づけた。

この様な型は、丹沢、箱根、伊豆半島、小仏山地、甘利山などにしばしばみられるようで、博物館の収蔵標本のなかにあった。しかし、多くは太平洋側に分布するようで、最も日本海側寄りのものは長野県小谷村のものにあった。

葉形のみでテツカエデと誤った同定をしたことをお詫びするとともに、テツカエデの同定には、花または果実を見ることが必須であることを反省点として指摘しておきたい。

参考文献

- Ogata Ken, 1965 A Dendrological Study on the Japanese ACERACEAE, with Special Reference to Geographical Distribution. 演習林報告 (60): 31-87. 東京大学農学部付属演習林.

チョウジタデの呼吸根について

(金子紀子)

1997年8月、金沢自然公園のしだの谷にある小さな池におかしな物があると教えられて見に行った。長さ2cmくらいの白い軟らかそうなものが空中に向かって2,3cm間隔で1列に並んで立ち上がっていた。その後、称名寺の境内の池の縁でも同様のものを見つけた。しだの谷には、チョウジタデ *Ludwigia epilobioides* Maxim. とミズタマソウ *Circaea mollis* Siebold et

Zucc.があり、称名寺にはチョウジタデがあった。小学館の「園芸植物大事典 用語索引」に根の変形としてマングローブが呼吸根を出す。北隆館の「原色植物図鑑」にはミズキンバイは呼吸根を出すと書いてあったが、両方の場所とも、根元まで掘り取ることが不可能だったので確認できなかった。

1998年7月にチョウジタデとミズタマソウの苗をそれぞれ別のプランターに植え、水を約2cm張って育ててみた。ミズタ



チョウジタデ. 1997.10.7 称名寺にて.

個体の高さ(cm)と
水面上へ顔を出した呼吸根の本数

	8月3日		8月9日		8月16日	
	高さ	呼吸根	高さ	呼吸根	高さ	呼吸根
1	10	1	18	1	23	2
2	10	2	15	2	22	2
3	15	0	27	0	38	1
4	5	0	6	1	9	1
5	5	0	8	1	13	2
6	15	0	22	0	30	1
7	5	0	19	0	26	1
8	5	0	11	0	16	0
9	5	0	24	1	30	3
10	15	2	27	3	34	6
11	5	1	3	1	4	1
12	5	0	13	0	17	3
13	5	0	11	0	15	1
14	10	1	16	3	22	5
15	5	0	8	1	10	2
16	15	4	23	8	33	10
17	5	0	10	1	13	3

マソウは全て枯死したがチョウジタデは元気に育ち、呼吸根を出してきた。始めのうちほどの個体が呼吸根を何本出したか数えていたが日がたつにつれどの株の物であるか全く分からなくなったので数えるのを中止した。

開花がさかんになった9月18日に掘りあげた。今回の観察から以下のことが分かった。

1. 呼吸根を出した株は生育が良く50cm以上になったが、呼吸根を出さなかったり1回は出したけれど途中で無くなってしまったものは生育が悪く30cm以下にしか育たなかった。
2. 呼吸根は普通の根の所々から水面上に向かって伸びているわけではなく、独自に根元から長く伸びていて、その所々から水面上に向かう枝を出していた。
3. 呼吸根の色は汚白色で、手触りは柔らかい海綿状。通常の根よりやや太かつ

た。水面上に伸びる部分の他に土の中に伸びる通常の根と同じひげ根も出していた。自分自身を支えるためと思われる。

4. 気温が高くなり成長が活発になってくるにつれて呼吸根の数も増すという傾向が見られた。

鎌倉のセイコノヨシも健在です

(奥津 均)

セイコノヨシ *Phragmites karka* Trin. の和名は、中国の杭州にある周囲15kmの「西湖」に由来すると言われます。草丈が4mにもなることから、別名セイタカヨシともいいます。本誌46号に同種についての記事があり、鎌倉の産地の状態が不明とのこと、筆者が7月に再調査をしたので今までのいきさつを含めて報告します。

これまで記録があったのは、藤沢・鎌倉線という道路沿いの笛田・梶原・常盤地区で、この辺りは戦前より稲作地帯でした。現在も引き水用であった3本の川（大塚川、笛田川、新川）が流れています。極楽寺の北を水源とする大塚川は北西に流れ、大船・江ノ島間のモノレールの下で、南側から流れてくる笛田川と合流します。この川はさらに西に深沢高校まで流れ、藤沢・鎌倉線を横切り、柏尾川へと続きます。

大塚川のもっとも水源よりの橋が、常盤山文庫の下にあり、旧地名より立石橋と呼ばれます。セイコノヨシは、立石橋からモノレールの下までの約800mの間ずっと健在で、完全な乾燥地にも残っています。モノレールの下から手広十字路までは、かつてはセイコノヨシがいましたが、現在は暗渠となり全滅しました。

笛田川は鎌倉山の北側を源として、今でも稲作は続けられており、田は残っていますが、セイコノヨシは昔から見てい

ません。

藤沢・鎌倉線の東側を流れる新川は、葛原ガ岡神社の下を水源にしていますが、この流域では水を田畑で利用することは無く、ドブ川状態になっています。旧野村総研前の掘割にセイコノヨシの群落がありました。今回は木が茂り、見つかりませんでした。

まとめて考えるに、セイコノヨシが大塚川の流域と新川の一部に生育していた共通の条件として、川が北向き斜面に沿うように流れています。水温が周りより低いとか、冷風が通るとか、何かそこにヒントがありそうです。以上報告します。

ホシクサの大群落について

(馬場しのぶ)

海老名市の北、座間市との境に近い上今泉は一面の水田地帯で、いわゆる田んぼの植物が面白いところです。調査が始まって以来、何回か足を運んで、クログワイやミゾハコベ、アゼトウガラシ、ホソバヒメミソハギ、アブノメ等の植物を採集してきました。

その中の休耕田のひとつに、ホシクサ *Eriocaulon cinereum* R.Br. var. *sieboldianum* Murata が大群落になっているところがあることを、昨秋、相模原の松本雅人さんに教えていただき、そのあまりの見事さにびっくりしてしまいました。そこは、何回も通っていたのに、ほんの少し先のその場所までは足を延ばさないといたところでした。

今年行ってみると、昨年よりもアキノウナギツカミヤイヌビエ等の植物が入りこんできてはいましたが、ますます生育は盛んで、足の踏み場も無いほどのホシクサでびっしりと埋め尽くされ、まるで一面に小さな水玉を描いたような素晴らしさです(表紙写真参照)。珍しいコウキヤガラも数株あって、周囲の田と比べてどんな特殊な条件的違いがあるのか、すぐ隣の田ではホ

シクサも2,3株見られる程度なので本当に不思議です。

つい、あちこちに宣伝をして、東京都高尾博物館の新井二郎先生はじめ八王子自然友の会の方達もご案内したのですが、これほどのホシクサの大群落に出会ったのは、やはり初めてとかで、ずいぶん喜んでいただきました。ただこども休耕田の運命として、このまま放置されれば数年の内には他の植物に侵蝕されて、いずれ消えていってしまうでしょう。それでも、この辺り一帯の田んぼは比較的農薬を使用していないらしく、そのおかげでまだ休耕田に特有な植物が豊かに見られるのはなによりの喜びで、今後よく観察すれば思いもかけない植物の出現が見られるのではないかと楽しみです。

編集後記

今年に入ってから新しい神奈川県植物誌の編集会議が2回、執筆者会議が1回開かれ、編集方針や体裁などについて話し合いが行なわれました。そして、新しい植物誌では句読点をやめて、カンマやピリオドを使うことが決められました。もうお気づきのことと思いますが、今号から本誌でもカンマとピリオドを使っています。違和感はありませんね？

本誌のバックナンバーを見てみると、毎年3号を発行しようと目標を掲げつつ、必ずしも達成されていません('89年から今年までの10年で年平均2.2号)。不思議なことに、西暦が偶数の年は3号出されることが多いこともわかりました('92年、'94年、'96年は3号まで出ています)。それなのに、今年2号しか出せませんでした。無念!今のところF氏の原稿が次号送りになって陽の目を見る日を待っています。次号が一日も早く出せるよう、みなさまの投稿をお待ちしています。